

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：24506

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06552

研究課題名（和文）中山間地域における訪問看護の連携促進を目指したICTネットワークシステムの構築

研究課題名（英文）Construction of the ICT network system aiming at cooperation promotion of the temporary nursing at home in the intermediate and mountainous area

研究代表者

山本 大祐（YAMAMOTO, DAISUKE）

兵庫県立大学・看護学部・助教

研究者番号：10755820

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中山間地域である兵庫県但馬地域をパイロット地域として中山間地域の特性を加味したICTネットワークシステムを構築した。中山間地域の各訪問看護ステーションの情報を一元化したWebサイトの活用と評価をとおして、訪問看護ステーション間の情報共有と連携促進を可能にするICTネットワークシステムの有用性を明らかにすることができた。また、訪問看護師自身も他の訪問看護ステーションの訪問看護師とネットワークをもつことを求めていることが分かった。

研究成果の概要（英文）：This study enforced the Tajima, Hyogo area that was intermediate and mountainous area as Pilot area. I built the ICT network system that added a characteristic of the intermediate and mountainous area. I carried out utilization and the evaluation of the Web site that unified the information of each temporary nursing at home station of the intermediate and mountainous area. I was able to clarify the usefulness of the ICT network system to enable information sharing and the cooperation promotion between the temporary nursing at home station. In addition, I understood that visit nurse oneself demanded that I had a network with the visit nurse of other temporary nursing at home stations.

研究分野：看護管理学

キーワード：訪問看護 中山間地域 ネットワークシステム

1. 研究開始当初の背景

これからの日本社会における医療は在宅医療が中心に発展していくことが周知されており、社会の訪問看護に対する期待も大きくなっている。訪問看護従事者である訪問看護師は在宅において支援活動を行う専門職であり、高齢社会の医療における問題であった慢性的な症状と障害を持つ人の増加と終末期を迎える人の増加という問題に応えることのできる重要な存在である。

現在、訪問看護師の多くは訪問看護ステーションに所属し、訪問看護を提供している。しかし、全国に展開している訪問看護ステーションの多くは社会からのニーズは高いにも関わらず、伸び悩んでいる状況にある。一方、訪問看護の利用者数の推移については、医療保険、介護保険ともに訪問看護を利用している人は顕著に増加しており、今後もさらなる増加が予想され、訪問看護のニーズは高い。つまり、訪問看護に対する社会のニーズは増えているのだが、そのニーズに応えられるだけの訪問看護ステーションの数が増えていかないという課題がある。

訪問看護ステーション数が伸び悩んでいる要因について、日本看護協会(2013)は「訪問看護従事者を確保し定着させることが困難」「訪問看護ステーションの運営を継続していくことが困難」「訪問看護の理解不足」の三点を伸び悩みの要因として挙げている。以下より、それぞれの課題について述べる。

まず「訪問看護従事者を確保し定着させることが困難」な課題についてであるが、現在の日本全国の訪問看護ステーションには勤務する看護職員数が5人未満の小規模型の事業所が多いことが人材確保と定着を妨げる大きな要因になっている。小規模型の訪問看護ステーションのスタッフの勤務体制においては身体的に負担が大きい。そのため、訪問看護師数が少ない小規模型の訪問看護ステーションには訪問看護スタッフの離職を引き起こす要因が多い。

次に「訪問看護ステーションの運営を継続していくことが困難」な課題についてであるが、これは訪問看護の利用者の状況によっては直接訪問して提供するケアの時間以上に関連業務の時間が多くなる場合があり、訪問回数が増やせないことが大きな要因になっている。その解決手段の一つが、専門特化した訪問看護ステーションの設置ということになる。しかし、過疎化が進む中山間地域において小規模型の訪問看護ステーションが専門特化することは、事業所の運営としても困難な状況がある。

最後の課題が「訪問看護の理解不足」の課題である。これは、ケアマネジャーや利用者とその家族が訪問看護の有用性を十分に理解できていないことが要因になっている。訪問看護をケアプランに入れるかどうかの選択時に、あまり訪問看護のことが分からないケアマネジャーはケアプランに入れるとき

に迷うことがある。これは、訪問看護自体の広報不足とも思われるが、訪問看護師自身が訪問看護の説明をできない現状があり、小規模型の訪問看護ステーションにとっては訪問看護師の過重労働が問題になっているだけに、広報活動等の業務を追加することは困難であることが予想される。

中山間地域における訪問看護の現状として、訪問看護ステーション設置数は少なく、従事する訪問看護師数も少ない。そのため、永田(2012)らの研究によると多様化するニーズに対応するために、訪問看護師が提供するケアも複雑化し、効率的に訪問を行えないことが問題視されている。対策として訪問看護事業所の専門特化による、効率的な対応を期待する声があるが、過疎化が進み医療資源が限られている中山間地域では、地域住民にとって不利益となり、なおかつ専門的ケアを提供できる看護師確保も困難な現状がある。また、訪問看護利用者の安心した在宅生活を支援するためには、24時間の訪問看護対応が求められるが、中山間地域の訪問看護ステーションの多くが小規模型であり、磯山ら(2009)によると、規模が小さい訪問看護ステーションが24時間体制をとることは少ないスタッフで広範囲の訪問移動を必要とするため、多大な負担を強いることを明らかにしている。さらに、スタッフの負担増大は、訪問看護師の離職要因につながる恐れもある。このような状況においては、訪問看護ステーション管理者自身もオンコール当番を担う必要がでてくるため、管理者業務に専念できず、管理者にとって最も重要な他機関との連携業務に支障をきたすことも課題である。特に、訪問看護の新規契約において柏木(2011)はケアマネジャーとの連携不足は、訪問看護の有効活用がされにくい等、深刻な課題にもつながりやすく、ケアマネジャー側からも、訪問看護ステーションに気軽に問い合わせがしにくいことを述べており、双方の信頼関係の形成に支障をきたす要因となる。筆者(2015)は、「中山間地域の訪問看護ステーションの情報提供ツール作成を通じた連携システムの構築」をまとめる過程で、中山間地域の地域包括支援センターに所属する主任ケアマネジャーに、訪問看護ステーションに関するヒアリング調査を行った。その結果からも、多くの主任ケアマネジャーが地域内の訪問看護ステーションに気軽に連絡や相談がしづらいことが明らかになった。

中山間地域の大半の訪問看護ステーションの管理者が管理者業務に専念できない現状は、訪問看護が地域の有力な資源として定着できない要因としても考えられる。管理者自らが訪問看護に行く必要がある状況では、地域に働きかける時間的・人力的余裕が取りにくい。また、人口がまばらな過疎地域では、口こみが広がりやすく、山間地域では家の中に他人が入ることへの抵抗感があるため、その地域特性から訪問看護が理解されづらい

現状がある。このような課題に対して、地域関係者の輪の中に入っていき訪問依頼や相談に適宜対応したり、訪問看護ステーションが地域において必要不可欠な資源として住民に認知される必要がある。しかし、中山間地域の各訪問看護ステーションの現状としては、そのように地域に働きかける時間的余裕や人手は不足している。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中山間地域の訪問看護ステーションの情報を一元化した Web サイトの活用と評価をとおして、訪問看護ステーション間の情報共有と連携促進を可能にする ICT ネットワークシステムを構築し、中山間地域の課題解決に向けた基礎資料を提示することである。本研究では、中山間地域である兵庫県但馬地域をパイロット地域として中山間地域の特性を加味した ICT ネットワークシステムを構築し、その運用と評価をふまえて中山間地域の訪問看護が抱える共通課題を見出し、課題解決に向けた方略を検討することを目指す。

3. 研究の方法

本研究の実施計画は、以下に述べる三段階で計画した。

第一段階は、但馬地域の訪問看護ステーション同士が互いをよく知り、団結して訪問看護事業を地域に情報発信し訪問看護を浸透させていくことのできる Web サイトを開設することである。

第二段階は、開設した Web サイトを運用し訪問看護の情報提供対象者となるケアマネジャーと地域住民に Web サイト内容の評価をしてもらうことである。

第三段階は、但馬地域の訪問看護ステーション同士のネットワークシステムに必要な要素を明らかにするために、アンケート調査を実施することである。

なお、本研究は中山間地域である兵庫県但馬地域をパイロット地域とし、但馬地区訪問看護ステーション連絡協議会の協力のもと実施していくこととする。

4. 研究成果

(1) 第一段階

Web サイト開設と本格運用することができた。Web サイトに掲載する情報は、【トップページの各訪問看護ステーションの共通項目として掲載する情報】と【各訪問看護ステーションの紹介ページに掲載する情報】の2つの視点に分けて、情報項目を選定した。【トップページの各訪問看護ステーションの共通項目として掲載する情報】では、「訪問看護利用者宅の地域を訪問看護届出エリアにしている訪問看護ステーション」、「訪問看護利用料金」、「連絡協議会からのお知らせ」、「ステーションからのお知らせ」、「ご利用の流れ」、「利用者の声」、「Q&A」の7項

目となった。【各訪問看護ステーションの紹介ページに掲載する情報】では、「事業所概要」、「ステーションの紹介」、「看護行為」、「医療処置行為」の4項目となった。

(2) 第二段階

但馬地域各市町に設置されている各地域包括支援センターで定期的に開催されているケアマネジャーの連絡会議及び研修会に参加しているケアマネジャー227名(回答があったのは131名)、但馬地域内の高齢者大学に在学されている一般住民(高齢者)の方103名を対象にアンケート調査を実施した。回答があったのは、ケアマネジャーは131名、一般住民(高齢者)の方は33名であった。

調査結果を用いて、ケアマネジャーや地域住民が訪問看護の利用を考える時に活用できる Web サイトになっているのか検証した。アンケート調査の結果としては、両者ともに Web サイトの内容について「訪問看護を身近に感じる」ことができ、「各訪問看護ステーションが目指している」ことが分かり、「訪問看護利用者を大切にするケアを実践」し、「在宅看取りにおける訪問看護の重要性」が分かる内容になっているとする評価を得た。しかし、訪問看護実践に関しては写真などの視覚素材が無いと訪問看護がイメージしづらく分かりづらいということも判明した。さらに、一般住民(高齢者)にとっては、訪問看護を利用する基準が分かりづらく、この点においては今後の修正が必要であることが分かった。

(3) 第三段階

但馬地区訪問看護ステーション連絡協議会に加入しておられる全ての訪問看護師100名を対象にアンケート調査を実施した。回答があったのは、92名であった。

調査結果は、本研究期間において訪問看護ステーション同士のネットワークを活かした取り組みと捉えたものは、「Web サイト作成」とともに「研究や実践の成果を学会や研修会等で報告や発表すること」「但馬地域の訪問看護ステーション同士で地域の訪問看護について語り合う場」の設定であることも分かった。また、大半の訪問看護師が訪問看護ステーション同士のネットワークを構築する必要性を感じていることも判明した。

(4) 今後の課題

本研究は、中山間地域である兵庫県但馬地域をパイロット地域とし、但馬地区訪問看護ステーション連絡協議会の協力のもと実施することができた。そのため、各訪問看護ステーション管理者との連絡調整については密にとることができ、Web サイトの作成と評価をとおして各訪問看護ステーションのネットワークシステムを構築することができたことは意義深い。しかし、各訪問看護ステーションのスタッフである訪問看護師への働きかけに関しては十分とはいえず、ネットワークシステムについての理解についても

不明瞭であった。中山間地域における訪問看護の諸問題では各訪問看護師の課題解決に向けた取り組みも必要になってくる。今後は、各訪問看護ステーションの訪問看護師が活用できるネットワークシステムを構築していくとともに、その要素についても探求していく必要がある。

<引用文献>

日本看護協会、訪問看護の伸び悩みに関するデータ（医療計画の見直し等に関する検討会）2013

<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001jlr7-att/2r9852000001jlv6.pdf>

永田智子、栗原雄樹、田口敦子、成瀬昂、村嶋幸代、利用者の状態像別にみた訪問看護業務の内容と時間、日本在宅ケア学会誌、16（2）、2012、61 - 68

磯山優、王麗華、山間部における訪問看護ステーションの管理、埼玉学園大学紀要（経営学部編）11、2011、1-8

柏木聖代、ケアマネジャーとのギャップを埋めて訪問看護の利用を増やす、訪問看護と介護、16（8）医学書院、2011、653
654

山本大祐、但馬地域訪問看護ステーションの情報提供ツール作成を通じた連携システムの構築、兵庫県立大学大学院修士論文、2015

5．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計0件）

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

特記事項なし

6．研究組織

(1)研究代表者

山本 大祐（YAMAMOTO DAISUKE）

兵庫県立大学・看護学部・助教

研究者番号：10755820

- (2)研究分担者
なし
- (3)連携研究者
なし
- (4)研究協力者
なし